
シノ

石杖 火鉈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シノ

【ZPDF】

N76130

【作者名】

石杖 火鉈

【あらすじ】

いつも通りの日常。

いつも通りの喧騒。

いつも通りの風景。

いつもと違う道。

そこから、いつも通りの生活は一変する。

「人は生きるための快樂は、不必要だが無ければ生きているとは言えないよ。」

そんな言葉を吐きながら、彼は笑っていた。

その笑顔は無邪氣そのものだが、何処か歪だつた。

私は、そんな彼の笑顔と独善的な言葉に嫌気を持った。
いや、嫌気どころの話ではない。

激しい嫌悪感、吐き気を覚えさせられた。

だが、
、
、
なにか、私の中で納得してしまつた。

そう、ポツカリと開いていた穴を蓋してくれるようにな
その言葉が、私の穴を塞いでくれたのだ。

わわやかな1日

乾いた音が響く……

この区画の朝は、これで始まる。
慣れただ。

この区画に来た頃は、ベッドの中で震えていたのに…

部屋に備え付きの錆びた金属製のベッドを軋ませながら、重い瞼を開け陽の光を浴びる。

窓から外を見ると、先ほどの騒ぎを聞きつけた野次馬たちが集まっている。

これもまた、いつものことである。
まず、『　』した本人が奪い取り、余つたものを回収しにくる。
残るのは、『　』だけだ。
いや、あの集まりでまた余り物の奪い合いが始まつて新しい『　』ができるだらう。

先ほど野次馬と評したが、実際ハイエナの方が近いとも感じる。

そんな、日常を頭の片隅で考えながら制服に袖を通す。

いつもと変わらぬ日常

いつも通りの時間に、部屋を出て

いつも通りに……

「いやだな。」

知らず口に出た。

今日は裏道で行こう。

いつも通りのことなのだが、流石に朝から『

』を見ることには

いや、慣れようとも思わないのだが。

少し遠くなるが大した差は無いだろう。

私は、いつも通りの日常を駆け出した。

慣れな

必要性

「シノツ…！」

通学途中、私の家と学校まで丁度中程で後ろから声をかけられた。振り向くと、かごの曲がった自転車を必死に走らせている子と曰があつ。

それを私は、さして気にせずに前へと歩き出す。

「ちょ、ちょっと…！」

後ろから非難めいた声が聞こえたが気にはしない。

「止まれって言つてんのよ…！」

派手な音を発てながら、自転車」と突っ込んできた。激突のお陰で、私と自転車（あとの持ち主）は近くの草むらに投げ出された。

「痛いんだけど…・・・」

「なによつ！-！友達が一緒に学校まで行いひつて誘つてあげてるのに無視するソツチが悪いでしょ。」

「そんな事、一切聞え…」

「あ～～-また、かごの形変わったじゃん。」

「…………」

「どうしてくれんのよ…！」

（そんな事を言われても、突進してきたのはやつちなの…）

「「」めん。」

とつあえず、謝つてもいい。

「…………」

すると、向こうは面食らった顔をしていた。
そして、微笑みながら

「分かればよろしく。」

なんて言いながら、手を差し出してきた。

ありがたく手を借りることにする。

誰かのせいで、身体中痛いし。

で、落ち着いてから

（この人誰だろ？）

恐らく、クラスメイトなのだろうが記憶に無い。
だが、そもそも当然のように私の横を歩いてくる。

そんな事を考へて、内に教室に着いていた。

「遠櫻、お早う。」

「お早う。」

そう言いながら、隣の女子は離れていった。

トオノキ、

恐らく、彼女の名前だろ？

外見は

髪を、左側に纏めて結つており
目は、クリツとしている。

背丈は約145cmあたりだろう。

初対面の印象でも

明るく、朗らか、やる気に溢れている。
とでも、言つておけばいいのだろうか。

まあ、そんなこと私には関係の無いことなのだが。

『他人と必要以上に関わらない』

それが、私の日常だから……

学校にきたが、大してすることはない。
いつも通り、7限済むまで過ごすだけ。

昼食の時間。

この学校には、学食があるが行くのは大抵男子のみである。
女子が行かない理由は、雑だからだ。

味付けも、見た目も。

まあ、そう感じているからか自分も学食には行かないのだが。
今日は、弁当を用意していないからしょうがない。
学食で適当に、パンでも買おう。

屋上に出る。

夏ならまだしも、この時期に屋上で食べようという人間はない。
個人的にはありがたい。
他人と関わっていいことは無い。

ふと、屋上から見える景色に目をやつた。

真っ直ぐに上へと伸びるビル群

綺麗に舗装された道路

年のシンボルとして建造されたタワー

そのどれもが、自分の目ではその全てが曲がつて見える。

「はつ」

自嘲気味な笑みが込みあがつてきた。

全て曲がっているなら、自分は何処に立っているんだ。
今までの偉人達の残した法則を全て無視しているではないか。

恐らく、いや絶対だが

他の人が見たら綺麗な街なのだろう。
ここにいる自分が異常で歪なのだろう。

その事実にまた笑みが上がつてくる。

もし自分が異常ならなぜ、正常な生活を送っているのか。
それはしようがない。

正常な生活を送らなければ、この世界では生きていけないのだから。

視界の隅に、黒いノイズのようなものが見えた。
振り向くが何も見えない。

やつと来た。

また笑みが上がつてくる。

だが、これは、さつきのような嘲るような笑みではない。
目の前に楽しみがあるのが分かった笑みだ。

そう、だから世界が眠るまで待とう。

どれほど待ち遠しくても、楽しみは後に残した方が

その時の快感が大きくなるから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7613o/>

シノ

2010年11月17日00時10分発行